

「主は真実な方」  
ペンテコステ礼拝

七里教会 2022年6月5日  
使徒言行録2：1-13  
テサロニケの信徒への手紙二3：1-5  
佐々木 佐余子

今朝の礼拝はペンテコステ礼拝ですので、「テサロニケの信徒への手紙」を学びつつ、ペンテコステにも言及してお話したいと思います。ペンテコステ礼拝は主イエス・キリストが復活して50日目に聖霊が使徒たちに降臨した日として覚えられています。

最初に、五旬祭の日に聖霊が降る出来事から学びます。主イエスが復活されて、主の弟子たちが、エルサレムに集まって祈りをしている時、そのところ、使徒言行録の2章1節2節3節を読むと「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」のでした。「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」のです。聖霊降臨の何とも不思議な出来事です。こうしてペンテコステの聖霊は、復活されたイエスの霊であり、この霊を受けた人たちは、新しい「神のイスラエル」となり、キリストの教会が誕生したのです。その群れは主の弟子たちと女性たちがいたでしょう。その時一同は聖霊に満たされ霊が語らせるままに他の国々の言葉で話し始めたのです。さて、この騒ぎは一体、何であろうと大勢の人々が集まってきました。この人々はいわゆる里帰りのユダヤ人だったのです。自分の生まれた故郷にお祭り（五旬祭・刈り入れの祭り）があるので、外国に住んでいたユダヤ人たちが帰っていたのです。日本だったらお盆で里帰りをするでしょう。と言ってもご家庭がクリスチャンのお家の方はご存じないと思いますが、日本ではそういう風習があるのです。今年は帰ろうか、いやどうしようかとそわそわするのです。8月にお盆休みがあるので。

5節6節を読みますと「さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉で使徒たちが話をしているのを聞いて、あっけにとられてしまった。」のでした。使徒たちの話を聞くとヘブル語ではなく、自分たちの国の言葉で話をしているので驚いたのです。「あっ、何を話しているのかわかる。神さまを賛美している。」これはどういうことでしょうか。この集まったユダヤ人たちは昔、イスラエルから出てよその国に移り住んだ人々です。戦争が度々起こっていたので離散したユダヤ人（ディアスポラ）なのです。その子孫なのでしょう。今で言ったらウクライナの人々に似ています。7節8節を読むと「人々は驚き怪しんで言った。『話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか』と驚いたのです。これは、聖霊の働きによるものなのです。2節に「激しい風が吹いてくるような」とありますが、もともと風はギリシャ語では霊と同じ言葉であり、霊

は炎のように人間の罪を浄める作用をするのです。そういう霊が留まり奇跡の業が起こったのです。9節10節11節を読むと「わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」と言って皆驚いたのです。ここに書かれた国を調べてみると、パルティア、メディア、エラムとは、ローマ帝国以外の東に住んでいるユダヤ人で、今で言ったらカスピ海あたりのイランあたりでしょうか、エラムはペルシャ湾の北に住んでいるユダヤ人です。メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリアは地中海北東部の諸地方に住んでいるユダヤ人、エジプト、キレネに接するリビアはエジプトの北西部に住んでいるユダヤ人ですが、アラビア方面にも住んでいるユダヤ人がいて、刈り入れの祭りのために遠路はるばるエルサレムに帰っていたのです。彼らは使徒たちの話を聞いて皆驚き、感心し帰って行ったのです。その彼らが実際見て、聞いた出来事を奇跡のみ業を、家に帰って近所の人たちに話したということもあると思います。そして伝道は広まっていったのです。炎のような舌が一人一人にとどまったのは、将来、いろいろな言語で伝道が進められていくことを暗示しているようにも思えます。

あれから2000年以上たって、聖霊の不思議な降臨の出来事を覚えつつ、わたしたちもペンテコステ礼拝を守っています。2000年も世界で教会が継続しているのは、まだ聖霊が先だって歩いてくださっている証拠でしょうか。教会はクリスマス、イースターそして、ペンテコステの3つの教会暦を大事にし、特別な礼拝を守っているのです。

その後、エルサレムには信者が増加し、パウロによれば500人もの人々が、主イエスを信じる者になりました。(コリント一 15:6)ギリシャの北部のテサロニケにも信じる人たちが多くあられ、パウロや他の弟子たちによってテサロニケに信徒たちが多く生まれたのです。パウロはコリントからテサロニケのクリスチャンたちに手紙を送り、指導し平安を与えました。今朝は3章の1節から5節まで学びます。パウロが最初に執筆したこのテサロニケの信徒への手紙一、二は今回で最終回となります。この手紙は主イエスが復活されて約20年後に書かれていますので、初代のクリスチャンたちは、まだはっきりと主イエスの語られた福音や日常の生活や伝道を覚えていたでしょう。改めて振り返るならば、パウロが生まれた年は、ADの6年から8年と言われています。イエスさまより8歳ぐらい年下でした。主イエスが十字架に掛けられた時、パウロは推定23歳から25歳だったのです。その後、回心して伝道旅行に出かけるのですが、3章で「わたしたちのため祈ってください」と語っています。パウロの伝道は苦戦しましたが、パウロの強みは何といっても共に祈ることでした。パウロがコリントに行って伝道した時、パウロの他に弟子のシ

ルワノやテモテが同行しました。シルワノは、ローマの市民権を持つ人であり、テモテはお父さんがギリシャ人、お母さんはユダヤ人でした。この2人を連れてコリントに行った時、またフィリピでも迫害されました。その頃はローマ皇帝を神とする文化でしたので、主イエスの福音は異文化であり、しかも、弱小の植民地のような領土で生まれた信仰だったので、排斥されたのです。でも、蒔かれた福音は、やがて芽を出し、花が咲き、ついに実がなるに至りました。しかし、そこに到達するまで、どれだけ祈られたのでしょうか。2節で「道に外れた悪人どもから逃れられるように」とありますが、使徒言行録18章6節に記録されているように、「しかし、彼らが反抗し、口汚くののしったので、パウロは服の塵を振り払って言った。『あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く』」と言って、神を崇めるユダヤ人のティティオ・ユストという人の家に移ったのです。しかし、パウロは、「主は真実な方だ」と言っています。この信仰が音楽で言うと、まるで通奏低音のようにパウロを支えました。例えばある曲を弾くとき、ずっと押さえている鍵盤があるのです。その音は鳴りっぱなしです。一見、壊れたのかしら、と思いがちですが、その音が響くことで曲に深みが出て安定します。パウロの伝道は「主は真実な方」という信仰が通奏低音となって伝道を支えたと思います。ここで、パウロは3つの課題を提案しています。1つは、福音がすみやかに宣べ伝えられるようにです。コリントは繁栄した都市ではあったけど、非常に世俗化した町であったので、その町での伝道は難しかったのです。それに対してテサロニケの伝道は、短期間ではあったにもかかわらず、すぐ福音は広まりました。そのようにコリント伝道もテサロニケのようにすみやかに救い主イエス・キリストの御名が崇められるよう祈りました。2つ目は迫害を恐れるわけではないけれど、悪人たちの反抗や暴言は伝道の大きな妨げとなったのです。であるから福音が広く伝わるように祈ってもらいたいと願ったのです。3つ目は5節にあるように、「どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように」です。クリスチャンが、神の愛とキリストの忍耐をもって生活していくことは、神のみ心ですが、そういう生活は人間の努力ではなかなか出来るものではないはずです。どうしても、祈りつつ聖霊の力によらなければ出来るものではない。難しいです。パウロの伝道生活を通して、パウロははっきりと、「神は真実な方です」と信徒たちに言い残すことが出来ました。それは今までの伝道で実感できたことなのではないでしょうか。パウロはそういう信仰を与えられて、これから第3回目の伝道旅行に船出しようとしています。この主は真実な方です、という通奏低音があって、パウロの伝道は当時世界の中心であったローマにまで到達して福音のコインを流通させました。このコインがヨーロッパ一帯で他の貨幣を席捲するようになるのです。

「主は真実な方」です。わたしたちの信仰生活も振り返ってみれば、主は真実な方だと思うでしょう。人の世俗的な人生に、神の時、クロノスが結び合わされて、その人の人生が変えられていく。厭世的な人生が喜びの人生に変えられるのです。主は真実な方なので、お一人お一人の人生に携わって希望へと導かれます。